Skanda――迷宮土竜の狂想曲――

みずだしこーひー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｋａｎｄａ――迷宮土竜の狂想曲――

【Ｎコード】
Ｎ３７５７Ｘ

【作者名】
みずだしこーひー

【あらすじ】
【習作】逃げから始まる迷宮探索／２０１１－１１－０８　改題

daredevilitry

大きな背嚢を担いだ少年は生きるために迷宮へと足を踏み入れる。
静謐な迷宮の闇は新たなる夢追人を迎え入れた。彼の怪物は何者も拒むことなくすべてを喰らい続ける、歓喜も絶望も皆等しくー

迷宮へと足を踏み入れた冒険者たちがはじめに通されるのは地下二十五階からなる第一界層。武器を振り回せさえすれば、序盤は大して苦戦することもない。そして弱い魔物を何体も屠ることで新参者は仮初めの自信を植え付けられる。
魔物を倒したことによる達成感。
己が強くなったかのような充足感。
何事も成せるかのような万能感。
それらは驕りを生み出し、より強力な魔物との戦いにおいて相手の力量を読み違えさせ死を招く。
自らの力を過信することなく常に冷静さを失わずに立ち回れる者だけが迷宮の奥へと歩みを進めることを許されるのである。
しかし、この区分は必ずしもすべての者に当てはまるわけではない。
持たざる者。少数ながら迷宮にやってくる駆け出し(ノービス)の中にも戦う術を持たない者は存在していた。
第一界層だろうと戦う術を持たない者の末路は一つだ。序盤の魔物ですら倒すことができず、逃げ惑ったにせよ遅かれ早かれ命を落とすことになる。迷宮に慈悲などない。

しかし、何事にも例外は存在する。

第一界層だからといって戦う術を持たない少年は徘徊する魔物を息を殺して物陰に隠れることでやり過ごし、脇目も振らず下層への道を走り続けた。そして少年は丸一日かけて地下百階からなる迷宮の地下二十六階、第二界層へと辿り着いたのだった。

その所業はまさに奇跡としか言い表すことができない。
ここまでの行程において魔物の討伐数はゼロ、それでも隠れてやり過ごすにも限界があったために魔物とは幾度も遭遇していたので、少年の身体には夥しい数の傷が見受けられた。これまで何度も危ない場面はあった。それでもまだ死んではいない。少年は生きていることを実感するのだった。

迷宮探索に挑む際、少年の手持ちは道具屋で見繕って貰った初心者向けの救急セットのみで、既にギルドから貸与された『拡張（エクスパンド）』の刻印が施してあるポーチには神経毒の解毒薬しか残っていない。
少年が身に着けているのはボロボロの布の服だけで靴すら履いておらず、武器と呼べるものは首から下げた石のナイフしかなかった。そんな少年の有り様にギルド貸与のポーチと何も入っていない背中の大きな背嚢は異様に浮いていた。

常識的に考えれば、武装も調えず最低限のアイテムのみで迷宮探索に挑むのは自殺行為としかいえない。
何故、少年がそんな危険を冒してまで迷宮へとやってきたのか。
少年の目的は第二界層以降のトレジャーから手に入る魔具の入手である。ギルド公表によれば第二界層の適性ランクはC＋とされている。これは鬼熊（オウルベア）を倒せる力量を持つ冒険者を含むパーティでなけ

れば危険であることを示しており、そこに第一界層の魔物ですら満足に狩ることもできない駆け出しの冒険者が単騎で挑むのは無謀を通り越して正気の沙汰ではないといえよう。

それ故に第一界層では手に入らない魔具には価値がある。魔具の種類は武具や触媒、装飾品と千差万別。クラス？の魔具一つでも売れば半年分の生活費に化ける。

これは冒険者が魔具を手放すことが少ないことも理由に挙げられる。なにせ大抵の魔具は身に着けるだけで自力の底上げをしてくれ、魔具の組み合わせ次第でいくらでも戦略の幅が広がる。そのため魔具を使うことにより迷宮探索が楽になれば、魔具を売り払うことで手に入る端金以上に儲けを出すことなど第二界層に到達した実力を持つ者にとっては大して難しいことではないからだ。

ただ駆け出し（ノービス）や冒険者の大半を占める有象無象の三下にとって魔具は一獲千金の夢に違いない。

◇◇◇

第一界層同様に少年は物陰に隠れ、魔物をやり過ごしながら体力が自然回復するのを待っていた。既にポーションは手持ちにない。このフロアーからは第一界層よりも強力な魔物が徘徊しているため用心するに越したことはない。ここまで一体も魔物を倒せなかった少年にとっては尚更である。

行動に支障がない程度には体力が戻っていることを確認し、少年は今回の目的である魔具を入手するべく第二界層の探索を開始するのだった。

◇◇◇

幾度となく魔物の襲撃を命からがら逃げ果せフロアー内のトレジャーを探し回ること数刻、少年は地下二十九階にまで辿り着いていた。各階フロアーを隅々まで虱潰しに探索することで、少年は数多くのトレジャーを発見していた。トレジャーの中身は魔具よりも触媒や魔導書が多かったが、それでも入手した魔具の数は八となった。魔具の内訳としては武器一、防具三、装飾品四、防具には重量のある金属鎧が含まれている。残念ながら手に入れた武器はロッドだったので魔道士ではない少年には扱うことができなかった。

ここまでは順調にことが運び魔具の入手という目的は果たしたが、少年にはまだ試練が残されている。この迷宮には帰還門（ゲート）と呼ばれる転移装置は五十階にしか設置されてないため、それよりも浅い階層では来た道を引き返すしか地上へ戻る術はない。

死の恐怖に直面しながら進んできた道を重い荷を担いで戻らなければならない、流石に現状の装備では心許ないと考えた少年は手に入れた魔具の中からフーデッドローブとブーツを身に着けることに決めた。

装飾品の使用を見送ったのは装飾品は呪われていることが少なくないため、一度鑑定してからでないと命に関わることもある。それに呪いを解くにはかなりの費用が掛かる。命懸けで魔具を手に入れたのに呪いを解くためにその成果を手放さなければならない状況に陥るのは愚の骨頂、装飾品の効果は魅力的でもリスクは避けるべきだと少年は判断したのだった。

フーデッドローブとブーツを身に着けた少年は行動に支障がないかを確認する。防具が手に入っても戦う武器がないため、行きと同様全力で走り抜けなければならないのだ。動きづらいとなればそれは死に直結することも有り得るのでその場合は脱ぐ必要がある。例

え、魔具であるフーデッドローブとブーツに何かしら特殊効果があったとしても鑑定スキルを持っていない少年には判らないため、そのような不確定な要素は判断材料になり得なかった。

少年は知る由もないが、フーデッドローブは暗黒魔法『闇衣（ステルス）』の永久効果を持つアビスローブであり、ブーツは風の精霊魔法『浮遊（フロート）』の効果を持つフェザーブーツだった。これらは第二界層のトレジャーから魔具が手に入ると言えど早々お目にかかれない稀少な魔具である。偏に少年が達成した偉業への迷宮からの褒賞といえた。

ある程度動くのに支障がないことを確認し、少年は大きな背嚢を担いで地上を目指して歩き出すのだった。

daredevilltry（後書き）

随時改稿

deathblow

少年は戸惑いを覚えていた。信じられないほど地上までの道行きが順調過ぎることに。

行きの道程では幾度となく吸血蝙蝠（スティーラー）の大群に襲われ、曲がり角でばったり出くわした牙狼（ファング）にはフロアー中を追いかけ回されたものだが、地下二十九階から今現在、少年が居る地下十五階に至るまでの道程において一度も魔物に襲われることはなかった。行きの道程では襲い掛かってきたはずの距離にまで接近しているにも関わらず、此方に気付く素振りすら見せないのである。

少年は最初、『隠密（ハイド）』スキルが上達したのかと考えたが、その考えは直ぐさま捨て去った。都合よくスキルレベルが上がる程、世の中そんなに甘くない。

少年も自ずと魔具の効果に因るものではないかという考えに至ったが、魔具の正確な効果や発動条件が判らない状況下で魔具の恩恵を織り込んで行動するのは早計だと判断する。

少年は気を引き締め直して一層慎重な行動を心掛けたつもりだったが、魔具の恩恵を意識したことで残酷にも少年を死地へと誘う致命的なミスを招いてしまうのだった。

◇◇◇

それは地下九階、少年が物陰に身を隠して粉砕蛇（クラッシュテール）が通り過ぎるの

を待っている時だった。
粉砕蛇（クラッシュテール）は第一界層でも強者に分類される体長五メルトルを超す蛇の魔物であり、その尾の一振りは鋼鉄製の防具ですら粉砕するといわれている。
少年の実力では到底敵うはずもなく粉砕蛇（クラッシュテール）の索敵範囲から外れるのを今や遅しと待ちかねていると粉砕蛇（クラッシュテール）の進行方向の逆手に角兎（ホーンラビット）が姿を現したのだ。
粉砕蛇（クラッシュテール）に気を取られていた少年にとって予想外の出来事であり、少年は心臓の鼓動が跳ね上がるのを感じたが、何とか動揺を押し殺すと冷静に自らが取るべき最善の行動について考えを巡らす。
その間に粉砕蛇（クラッシュテール）は角兎（ホーンラビット）の気配に気付いて身を翻し、角兎（ホーンラビット）との距離を瞬く間に詰めると牙による一撃でその命を刈り取った。
粉砕蛇（クラッシュテール）が角兎（ホーンラビット）に攻撃を見舞う際に生じる隙を利用して一気にこの場から離脱しようと考え、タイミングを窺っていた少年は予想を遥かに超える粉砕蛇（クラッシュテール）の移動速度に一瞬呆気に取られたことで動き出すのが遅れてしまった。
この時、少年の中で迷いが生じた。このまま走り出して本当に逃げ切れるのか。本来、牙狼（ファング）すら置き去りにする程の健脚を誇る少年にアドバンテージがある状況であれば粉砕蛇（クラッシュテール）が追い付けるはずもないのだが、粉砕蛇（クラッシュテール）が見せた驚異的な瞬発力はその少年の自信を揺るがせるだけの衝撃を秘めていた。
動くべきか留まるべきか、決断を迫られた少年の脳裏を過ぎったのは魔具の恩恵のことだった。

かくして、天秤は傾いた。この場に留まる選択へ。
しかしそれは、既に『隠密（ハイド）』が解けていた少年にとって愚策でしかなかった。

◇◇◇

恐るべき威力を秘めた尾が迫る。少年は自らの失態を悟った。咄嗟に右へ身体を投げ出すとそれまで少年が立っていた地面は尾の一閃によって粉々に砕け散る。その光景を一瞥することなく、少年は直ぐさま態勢を立て直すと一目散に駆け出した。しかし、不覚にも少年は先程の一撃により散乱した破砕に足を取られ転倒してしまう。

起き上がろうとした少年は足に痛みを覚えたことで抗う術を失ったことを理解した。

自らへと振り下ろされようとしている尾の影を眺め、少年は運命に身を任せた。

deathblow（後書き）

随時改稿

godsend（前書き）

途中ですが更新。

godsend

富や名声、力を欲する数多の冒険者が世界各地から集い、日々しのぎを削る迷宮都市パルマリウス。この地に集う欲深き夢追人共の目的地たる迷宮『伏魔殿（パンデモニウム）』への入口は都市の中央に存在していた。

世界三大迷宮の一つに数えられる伏魔殿（パンデモニウム）は最深部に何人たりとも足を踏み入れたことのない未踏破の迷宮である。二百年程前から探索が始まり、現在の最深踏破階は地下七十九階。地上に存在する入口脇に設置された碑文に拠ると最深部は地下百階であるとされており、この迷宮が踏破されるのはいつになるのかようとして知れない。

◇◇◇

伏魔殿（パンデモニウム）内部、地下十七階。山と見紛う巨大な体躯を中心に夥しい数の魔物が無様に転がっている。消失してはいないだけで魔物は既にその生を散らしているといえた。

「第一界層とはいえ、流石に一撃とはいかないか」

魔物共が息絶える地獄絵図の中心、この光景を作り出した張本人である巨人族（ギガース）の男はそれらを一瞥し、残念そうに呟くと足下に転がる針鼠（ヘッジホッグ）の頭部を無造作に踏み潰す。魔物の姿は消え去り、魔物を構成していた魔素（エーテル）の残滓が男の巨体を取り巻き、あっという間に吸収されていく。自らの血肉が強化されていくのを感じながら、さっさと始末して先に進むべく男は転がっている魔物にとどめをさして回るのだった。

◇◇◇

巨人族（ギガース）は五メルトルを超す山の如き体躯を持ち、巨鬼（トロル）をも凌ぐ怪力で敵を蹂躙する生粋の戦士種族である。かつては争いを好み、常に戦乱に身を投じ続けたが、その結果多くの同胞を失い、現在は三つの氏族を残すのみの少数民族となっていた。

巨人族（ギガース）の戦士は驚くべき精確さで次から次へと魔物の頭部に金槌を打ち下ろし、果実が潰れたような鈍い音を迷宮内に響き渡らせ続ける。

巨人族（ギガース）専用の巨大な金槌を手に迷宮を暴れ回る男の名はゴライアス。今は亡きネフィリム氏族出身のCランク冒険者だった。五メルトルを超す全身を巨熊（タイラントベア）の毛皮で拵えた防具によって固めている様は歴戦の勇士そのものだ。

ゴライアスは第二界層を目指して日も昇らないうちに単独で迷宮探索に臨んでいた。二月（ふたつき）に一度、迷宮の構造は変化する、今日がその日に当たるのだ。巨人族（ギガース）である性（さが）か酒に目がないゴライアスが、朝早くから迷宮に潜れているのは昨晩酒場に寄らないで今日に備えた成果だった。

構造が変化した後、第一界層のルート情報が出揃うまで一週間は掛かるため、その間に独力でルートを把握して第二界層へ到達できれば魔具の入手確率が段違いに高くなる。大多数の冒険者が虎視眈々とこの機会を狙っており、ゴライアスも同様だった。前日の夜から備えて、早朝より迷宮探索に臨んだことで他の冒険者に先んじる形となったゴライアスは地下十九階に到達した所でこの日は切り上

げることにし、来た道を引き返していく。
構造が変化した初日で地下十九階まで進めたことはまずまずの出来である。運良く階下へのルートを探り当てられたこともあり、初日の進捗状況としては他の冒険者と比べてもトップクラスであるといえた。
例え、第二界層に到達可能な力量があろうと事前情報もない初日で第一界層を踏破しようとするのは蛮勇であり、ゴライアスもそこまでの無茶をする程馬鹿ではなかった。第一界層とはいえ、序盤はともかく終盤はBランク冒険者であっても命を落とすことも有り得る。それなりに腕利きの冒険者たちが慎重になるのは当然だった。

◇◇◇

時より遭遇する魔物を金槌の一振りで蹴散らしながら地上を目指し、行きで通った道を辿って地下九階のフロアーに到達した時のことである。ゴライアスが今日回収した魔晶（クリスタル）が幾らの稼ぎになるのかを考えているとフロアーの何処からともなく岩を砕くような大きな破壊音が聞こえた。
一般的な冒険者の判断として、そう遠くはない距離で戦闘が行われている場合、巻き込まれないように迂回するのが賢明なのだが、生粋の戦闘狂（バトルジャンキー）であるゴライアスの反応は盛大に間違っていた。
「今の音は……間違いない、粉砕蛇（クラッシュテール）だ。まさかこの階層にいるとは」
押さえ切れぬ歓喜にゴライアスの相貌が不敵に歪む。粉砕蛇（クラッシュテール）は第一界層に棲息する魔物の中で一二を争う強力な魔物であり、体長五メルトルを超す体躯は巨人族（ギガース）にとっても脅威となり得る存在だ。

しかし、元来強者との命を懸けたやり取りに至上の幸福を見出す血の気の多い巨人族（ギガース）の戦士たるゴライアスにとって、それ程の強者の存在は見敵必殺の相手に他ならなかった。

倒すべき強者を求め、本能の赴くままに山と見紛う程の巨体が信じられない速度でフロアーを疾走する。

そして二度目の破壊音が響き渡った。獣の如き獰猛なる狂戦士は標的の居所を正確に把握し、速度を上げて猛然と突き進む。

本能に従い、何の逡巡もなく邪魔する魔物を蹴散らして進む巨人族の戦士にとって向かった先にいるだろう瀕死の同業者のことなど既に頭になかった。

godsend（後書き）

随時改稿

godsend・?（前書き）

作品名、あらすじの変更を検討中……

godsend・?

迷宮『伏魔殿（パンデモニウム）』地下九階で繰り広げられる怪物同士の決闘。対峙する大蛇と巨人双方それぞれが繰り出す攻撃はどれも決定打に成り得る必殺の威力を秘めたものだった。大蛇はその身をしならせ風を切り裂き、巨人は豪腕を唸らせ金槌を振るう。迷宮を照らし出す灯火の下、躍動する二つの影は打ち合う毎に轟音を奏でつつ周囲に破壊を撒き散らしていく。

怪物の狂宴から少し離れた距離、情けない格好のまま地面の染みと化している少年はその光景をじっと見詰めていた。

粉砕蛇（クラッシュテール）が放った一撃は、幸運にも少年自身ではなく背負っていた背嚢を直撃したため、事なきを得た。少年自身への被害は、盛大に吹き飛ばされたことで身体に刻まれる擦り傷の痕が増えただけに留まっていた。実際には少年の背嚢の中に第二界層で入手していた金属鎧ーークラス？の魔具、ダメージイーターが持つ特殊効果『緩衝（バファル）』が攻撃を受けた瞬間に発動したことにより威力が大幅に軽減されていたのだが、魔具の効果を確認する術のない少年が知る由もなかった。

果てしなく続くかのように思われた怪物同士の殴り合いは遂に終焉の時を迎えた。

粉砕蛇（クラッシュテール）が放った渾身の尾の一振りを巨人族（ギガース）の戦士ゴライアスが最小限の動作のみで避けたことで空を切ったのだ。既に粉砕蛇（クラッシュテール）の行動パターンを把握していたゴライアスにとって、空振りで生まれた隙は勝負を決するに十分なものだった。

粉砕蛇(クラッシュテール)の攻撃を一切の無駄がない動きでゴライアスが躱したかと思えば、その巨体が信じられない速度で瞬く間に距離を詰め、攻撃を空振りしたことで無防備になっていた粉砕蛇(クラッシュテール)の頭部へと死を齎(ラストブ)す一撃(ロー)を叩き込んだ。

頭蓋骨が砕ける音が迷宮内に鈍く響いた。一瞬、粉砕蛇(クラッシュテール)は身体を痙攣させるとそのまま動かなくなり、その姿は魔素(エーテル)へと分解されて消えていく。

「がはは、ここまで本気になったのは久しぶりだ。ほんに天晴れな奴だったわ」

粉砕蛇(クラッシュテール)を打ち倒すとともに勢い良く座り込んだゴライアスはこれまでとは比べものにならない程の改変をその身に感じながら満足げに笑った。

然しもの巨人族(ギガース)の戦士であるゴライアスといえども消耗が激しく直ぐに動けそうもなかった。

◇◇◇

ゴライアスが第一界層有数の強敵を倒した余韻に浸っていると周囲から視線を向けられていることに気が付いた。

何故今まで気付かなかったのか訝しく思いながら周囲に目をやると少し離れた所に黒い塊が転がっているのが目に入った。物陰に隠れているのならともかく砂漠に樹木が生えているかのように目立っていたので気付いて当然だったが、それでも先程までその存在に気付けなかったことから驚異的な『隠密(ハイド)』スキルだとゴライアスは素直に敬服した。実際は魔具の効果なのだが、まだ第二界層へ到達していないゴライアスが魔具について知っている知識は、酒場で与太

話として何度か聞いたことがある程度のものだったので思い至らなかった。
ゴライアスはその姿が消えていないことから少なくとも生きていると判断する。そして床に転がる黒い靄のような物体に声を掛けた。
「そこの黒いの、同業者だな。この距離ですらうまく認識できんとは儂もまだまだということか」

自らを窮地に追い詰めていた大蛇ー粉砕蛇（クラッシュテール）を仕留めた巨人族（ギガース）の男、ゴライアス。座っているとはいえ五メルトルを超える巨躯は、小柄な部類に入る少年からするとかなりの迫力である。
ゴライアスの明瞭としない問い掛けに対し、少年は何と返答すればいいのか困った。しかし、少なくとも命を助けられたことに対して感謝の意を表すべきだと考える。少年が感謝の言葉を述べるとゴライアスは何故感謝されたのか分からず首を傾げて考え込んでいたが、そのうち理由に思い至った様子を見せた。
「ああ、あの蟒蛇（うわばみ）に襲われておったのは主（ぬし）か。感謝なんぞ要らん。彼奴とやり合うのを以前から楽しみにしておったのだ。主（ぬし）のおかげでそれが果たせたのだから、こっちが感謝したいくらいだ」

気にした様子もなく快活に笑うゴライアス。その言葉は偽りのない本心から出たものだったが、事情はどうであれ命を救われた少年としては何の見返りも求められない状況は酷く決まりが悪いものだった。そのため、少年はある提案をすることにした。

帰路の同行。命を助けられたことも含め、謝礼として魔具を一つ提示した。安全面の観点からすれば、単独で行動するよりも遥かに安全な地上への道行きとなるだろう。それに魔物に対抗する術を持

たない少年にとって、迷宮探索のエキスパートともいえる腕利きの先達と行動を共にすることで得られるものは多い。
それでも魔具一つは謝礼として出すには破格の条件といえたが、少年にとってそれ程の条件を出しても惜しくなかった。
結果として、その提案はゴライアスにあっさり受け入れられた。不本意にも謝礼の魔具のことを「一旗揚げてからの出世払い」と誤解されていたが。

少年の帯同を許したゴライアスは、行動を共にする上で最も重要なーー礼節の基本ともいえることを忘れていたのに気付き、少年に向き直った。

「儂としたことが、まだ名乗っておらんかったなあ、若人よ。儂はゴライアス、見ての通り巨人族（ギガース）の戦士だ。して、主（ぬし）の名は？」

「モーメット……ハーフエルフだ」

ゴライアスの問い掛けを受けて、少年は素性を明かすと目深に被っていたフードを外し、褐色の肌を晒すのだった。

godsend・?（後書き）

随時改稿

Ｈａｌｆ－ｅｌｆ（前書き）

そのうち改題……

Half－elf

ハーフエルフ、森人族（エルヴス）と他の種族との間に生まれし者。
エルフは、広大な『イプシロン大森林』を領土とする＜妖精国＞ムンダスに暮らす長命種の一つだ。金髪碧眼に透き通るような白い肌を持ち、先端の尖った耳が特徴的な種族である。また、他の森人族（エルヴス）には金眼を持つエルフの王族、ハイエルフや銀髪赤眼で褐色の肌をしたダークエルフが存在する。
因みに、エルフは非常に排他的な種族であり、同じ森人族（エルヴス）であるダークエルフですら身体的特徴の違いから敵対している程だった。

ハーフエルフは親の種族的特徴の幾つかを受け継ぐ。モーメットはくすんだ銀髪、褐色の肌といった風貌からダークエルフの流れを汲むハーフエルフだと判っていたが、物心つく頃には孤児として路上生活をしていたため、出自は不明だった。

◇◇◇

モーメットが自身のことをハーフエルフであると明かした時には、少なからず奇異な目を向けられるのが常だったが、巨人族（ギガース）であるゴライアスは一切、意に介さず別のことに注視していた。
「これは驚いた……やけに認識しづらいと思うとったらそのローブが理由だったのか。モーメット、それを何処で手に入れた？」
「ああ、このローブは第二界層の戦利品だ。今履いているブーツもそうだが、魔具は全部で八つ手に入れた……効果は分からない

が」

それからモーメットは今回が初めての迷宮であること、第二界層に至る道中や帰路の途中での粉砕蛇（クラッシュテール）との邂逅までの顛末をゴライアスに語っていく。

モーメットの話を訊いたゴライアスは、まさか第二界層まで走り抜けるような命知らずがいるとは思わなかったと愉快そうに笑うのだった。

◇◇◇

ゴライアスと地上までの道行きについて幾つか打ち合わせを済ませたモーメットは、フードをかぶり直すと先行して歩くゴライアスの後に続いた。

打ち合わせの末、ゴライアスは極力いつも通りの行動を心掛け、それをモーメットが周囲の警戒をしつつゴライアスの邪魔にならないようにしながら実地で見学することとなった。

モーメット自身の天性の『隠密（ハイド）』スキルとアビスローブの永久効果『闇衣（ステルス）』の重複発動のお陰で、ゴライアスに同行者の存在を意識させることなく普段と変わらない行動を取らせることを可能としていた。

迷宮『伏魔殿（パンデモニウム）』地下一階、既にモーメットの視界には地上への階段が入っている。モーメットは地下九階から地下一階までの短い道程ではあったが、とても貴重な経験が出来たことを実感していた。

唯ひたすら走り抜けた第二界層への道行きで常に付きまとう死の恐怖、それはモーメットの心に深く刻まれた。

そしてゴライアスと行動を共にしたことで、モーメットは迷宮探索における実践的なノウハウと修めるべき技術の数々を実地で目の当たりにし、多くのものを得ることが出来たのだった。

最後の階段を昇り、迷宮の入口脇の開けた場所へと移動したところでゴライアスはモーメットにある提案を持ち掛けた。

「特に問題もなく地上（うえ）に帰って来られて何よりだ……モーメットよ、他に用事もないのならギルドに向かう前に些（ち）と武器屋に寄っていかんか。儂が主（ぬし）の得物を見繕ってくれよう」

「いや、流石にそこまでしてもらうわけには……」

「遠慮なんぞせんでいいわい。冒険者の先達から新米冒険者への餞別とでも思ってくれ。それに高々第一界層序盤の道行きを帯同させただけじゃあ、魔具一つとは釣り合わんしな」

そこまで言われては固辞するべきではないだろう。モーメットはゴライアスの提案を受け入れ、連れ立って武器屋のある中央通りへと足を向けるのだった。

◇◇◇

迷宮都市パルマリウス西方通り市場。日が傾き夜が近付いているにも拘わらず、冒険者向けの露天商がひしめき合い喧騒が止まる気配を見せない。

夜市の賑わいを見せる通りの一角にゴライアスとモーメットの姿はあった。

武器を求めるのであれば中央通りにある大手の商会が営む店舗に行くのが一般的である。価格も適正価格の範囲で落ち着いているし、武器の種類も一通り揃っているからだ。

モーメットたちも初めは中央通りに足を運んだ。しかし、残念ながら五メルトルを超す巨人族（ギガース）が中に入れる程の店舗がなかったのだ。そもそも自分たちで武具を拵える巨人族（ギガース）が武器屋を訪れることなど殆どないため、店舗が巨人族（ギガース）の来店を想定した造りになっていないのも仕方がなかった。

幾らか武器の代金を渡してモーメットだけで武器屋に行かせようかともゴライアスは考えたが、そんなことをすればこの義理堅い男はこちらに遠慮して一番安い武器で済ませようとしかねないことに思い至った。そこで、ゴライアスは酒の席で一緒になった交易商が西方通りで商売をしていることを思い出し、今は市場の中を件の交易商を探して歩いていた。

「たしか市場の外れになったとボヤいておった覚えが……」

予想を遥かに超える露天商の数にゴライアスは辟易としていた。すると市場の賑わいから少し離れた所で見覚えのある女性が此方に気付いて声を掛けて来た。

「おお、巨人のダンナじゃないか。アンタがこの辺りに居るなんて珍しいねえ、何か用事かい？」

「元気そうで何よりだ、シア。今日は主（ぬし）の店に用があってな、以前

武器を扱っていると話していただろう。連れが扱えそうな得物を見繕おうと思ってきたのだ」

ゴライアスと親しげに話すシアと呼ばれた女性は妙齢の牛の獣人（ワッカム）ー牛鬼（ミノタウロス）とは異なり色白の美貌を持つ種族で、零れんばかりの豊満な谷間を惜しげもなく晒し、男好きしそうな肉感的な肢体の持ち主だった。化粧気はないが茶髪黒眼の愛らしい顔立ちをしたその女性に対し、ゴライアスは用件を伝えると傍らに立つモーメットを紹介する。紹介を受けたモーメットはフードを外し、簡単な自己紹介を済ませたが、先程とは打って変わって女性は心ここにあらずといった様子だった。

モーメットは訝しく思い、ゴライアスに説明を求める。

「彼女は一体……」

「時々ああなるのだ、気にするな。彼女は交易商のフリーシアン、近しい者はシアと呼んどる」

少々変わっとるがいい奴だとゴライアスは付け加えたのだった。

その後、何とか元通りになったシアはゴライアスの頼みを快諾すると店仕舞いを手早く済ませ、二人を連れて倉庫街へと向かう。

近況を語り合う二人の後をついて行くモーメットだったが、顔合わせからこれまでことある毎にシアから妙に熱っぽい視線を向けられている気がすることに困惑し、フードを目深にかぶり直すのだった。

Half－elf（後書き）

随時改稿

remuneration

迷宮都市パルマリウス北西部に形成された倉庫街へと足を踏み入れた一行は、雑多な街並みを背景にシアを先頭に奥へと進んでいく。すると通りを抜けた先、妙に広々とした空間に建つこぢんまりとした一軒家の前に辿り着いた。

「やけにぼろい建物だなあ……滅んだ故郷(くに)を思い出すわい」

目の前の建物を見やり、ゴライアスは思うままストレートな言葉を口にする。モーメットも口にこそ出さなかったが概ね同じ感想だった。

「手厳しいわね、もう少し言い方ってものがあるじゃない……風情があるとか」

建物の所有者であるシアはあんまりなゴライアスの言葉に不満気な様子だったが、品物を取ってくると言い残し建物に入っていった。程なくして大量の武器を満載した台車を押して戻って来ると建物の脇に併設してあるオープンテラスへと二人を案内し、台車の武器を幾つかテーブルの上に置く。テーブルには直剣、短刀、槍が並んでいた。

「駆け出し(ノービス)ならこの辺がオススメだけど、何か希望はあるかしら？目指す型(スタイル)とかあるなら参考になるわ」

モーメットに武器の良し悪しなど分かるはずもない。どう返していいか困ったモーメットはゴライアスに助言を求めた。

「武器は護身用に石のナイフを携帯していただけでよく分からないんだが」

首に下げている石のナイフに手をやるモーメットを見やり、ゴライアスは少し思案すると自らの考えを述べた。

「武器の扱いには向き不向きがあるから一概には言えんが、初めは近接戦闘に慣れるべきだ。近付かれたら何も出来ませんでは話にならんからな。それに主(ぬし)の脚力と『隠密(ハイド)』スキルを考えれば、長物よりは短刀の方が動きやすかろう」

ゴライアスの的確な助言を受けて考えを巡らせるモーメット。そこで共にゴライアスの弁を聴いていたシアがモーメットに対して気になったことを口にする。

「ねえ、もしかしてモーメットが着てる黒いのって魔具なの？」

「ああ、モーメットのローブは魔具だ……ブーツもそうだったな、他にも幾つか所持していると聞いとる」

「そういうことは早く言ってよ、魔具持ちならもう少し上等な品物(モノ)にしないとまずいじゃない」

考えを巡らせていたモーメットに代わり、ゴライアスが質問に答えるとシアは慌てたように台車へと手を伸ばす。テーブルの上に置かれた武器は決して悪いものではなかったが、魔具持ちの冒険者が持つには充分とはいえなかった。暫くの間、台車を前にブツブツと何事か呟いていたシアだったが、モーメットに向き直り戦闘経験の有無を再度確認した上である提案を切り出した。

「駆け出(ノービス)しだし、場数を踏む必要があるから上等なのを選んでくれれば、下位装備をサービスしましょう。

それと魔具の効果が分からないなら私がこの場で無償鑑定しても構わないわ、これでも『鑑定(アナライズ)』スキルを修めているから専門の鑑定士と遜色ないはずよ」

魔具の鑑定は通常、『鑑定(アナライズ)』スキルを持つ鑑定士でなければ行うことが出来ない。しかし、鑑定士は慢性的に人材が不足しているため、鑑定には予約が必要であり、かなりの額の鑑定料が掛かるのだ。下位装備の提供と魔具の無償鑑定、予想外の提案にモーメットは戸惑いを覚えたが、ゴライアスは提案の狙いに気付いてモーメットに補足してくれた。

「案ずるなモーメット、先行投資のようなものだと考えておけばいい。大方、今後贔屓にして欲しいのだろう」

「巨人のダンナは話が早くて助かるわ。商人としては魔具持ちの冒険者を上客に出来たら御の字だもの、ある程度の出費は痛くもないわ。だから遠慮なんてしなくていいのよ」

二人の言葉を受けて、モーメットとしては断る理由がないので提案を受け入れることにした。駆け出(ノービス)しにしたら商人と引き合わせて貰えるだけでも幸運なことで、今後の生活を考えれば魅力的な提案だった。

ゴライアスへの報酬のこともあり、モーメットは先に魔具の鑑定をお願いすることにしてポーチと背嚢からそれぞれ魔具を取り出していく。次から次へとテーブルの上に置かれていく魔具にシアは驚きの表情を浮かべ、ゴライアスは愉快そうに笑っているのだった。

シアは実際に現物を見ても俄かには信じがたい事実だとブツブツ言いながら鑑定に使う道具一式を取りに行き、戻ってくると早速魔具の鑑定に移り、一つずつ丹念に調べていく。一つ調べ終える毎に手元の書面に淀みなくペンを走らせるその姿にモーメットは暫し時を忘れて見とれていた。

テーブルの上に置かれた六つの魔具とモーメットが履いていたブーツの鑑定を済ませた後、モーメットが促されるままローブを脱ぐと下の服の体裁すらとれていないあられもない格好が露わになり、シアが興奮状態に陥りゴライアスにより強制再起動を施される一幕もあったがその後は滞りなく魔具の鑑定が終わった。シアはモーメットに鑑定書の束を手渡すと、魔具についての感想を漏らした。

「第二界層序盤で入手したとは思えないくらい良いものばかりだったわ」

シアの感想に対し、ゴライアスは迷宮の計らいだろうと軽く返すのだった。

◇◇◇

モーメットが入手した魔具は次の通り。

☆アビスローブ［クラス？］
防具／外套『闇衣（ステルス）』

☆ダメージイーター［クラス？］

防具／全身鎧『緩衝（バファル）』

☆フェザーブーツ［クラス？］
防具／靴『浮遊（フロート）』

☆ジェスロッド［クラス？］
武器／杖『闇・増幅（マクート）』

☆ストレガリング［クラス？］
装飾品／指輪『増幅（マクート）』

☆ハンチピアス［クラス？］
装飾品／耳飾り『鋭敏（キーン）』

☆クレセントチャーム［クラス？］
装飾品／首飾り『幸運（ラック）』

☆ムルガンバックル［クラス？］
装飾品／帯革（ベルト）『加速（アクセル）』

鑑定書にはより詳細な魔具の情報が記載されていた。その情報を基にモーメットはゴライアスにどれかを選んで貰い、報酬として渡そうと考えていたが、ゴライアスは魔具ではなくライセンスに記録されている迷宮内部の地図情報（マッピングデータ）を報酬として欲しいと申し出た。

「一端の冒険者としては、やはり宝は自分で開けたいものだろう」

これが冒険者の矜持かとモーメットは感動し、ゴライアスの意思を尊重して地図情報（マッピングデータ）を報酬として提供したが、実際は迷宮改変（ダンジョンシフト）の当日に第二界層までの経路（ルート）が出回ることは皆無であり、もしも市場で

取引されたとしたらギルド刻印入り金貨十枚以上の値が付いただろう。クラス？の魔具ですら相場は銀貨十枚程である。何も知らない新米冒険者が報酬をピンハネされる光景を商人は白い目で見ていた。

その後、ゴライアスがシアにモーメットへの餞別としてかなりの出費を強いられたのは言うまでもない。

remuneration（後書き）

随時改稿

Smooth sailing（前書き）

想定より更新が遅れてしまった……

まだ細部が詰めれてないけど上げときます。

Smooth sailing

迷宮『伏魔殿(パンデモニウム)』地下五階、黒衣に身を包んだ一人の冒険者ーモーメットの姿がそこにあった。

迷宮に初めて足を踏み入れたあの日からもうすぐ二月(ふたつき)が過ぎようとしている。魔物から逃げ隠れることしか出来なかったモーメットも今では得物を振るい、多くの魔物を狩ることが出来るまでに成長していた。

モーメットは黒色のフーデッドローブと麻の下穿きに羽根飾りの付いたブーツでその身を固め、ローブの腰元を帯革で絞り、ギルド貸与のポーチと鋼鉄製(スチールダガー)の短刀を二本差している。短刀はモーメットがゴライアスに連れられシアに引き合わされた後、妙に強気のシアによってゴライアスからの餞別として渡された代物だ。モーメットは鋼鉄を使った武器が市場に出回るレディメイドの中でも高品質でかなり値が張るものだと事前に聴かされていたため、ゴライアスとの相談もなくシアが鋼鉄製(スチールダガー)の短刀を差し出してきたことに困惑したが、シアの一睨みで口を噤んだゴライアスの様子から触らぬ神に祟りなし、有り難く頂戴した方が賢明だと理解したのだった。

◇◇◇

地下五階のフロアーに響き渡る断末魔の叫び。

フロアー内を徘徊する四頭の牙狼(ファング)の群れに遭遇したモーメットだったが、魔具の能力で底上げされた『隠密(ハイド)』スキルと圧倒的なスピ

ードを武器に牙狼(ファング)の群れを瞬く間に駆逐する。

モーメットは群れの存在を認識するや即座に踏み込み距離を詰めると先制の一撃で群れのリーダーを斬り伏せた。間髪入れず、勢いそのままに一足飛びで他の個体へ近付くと流れるような短刀の一振りで二頭の首を刎ねた。

第一界層に棲息する魔物の中でも屈指の行動速度を誇る牙狼(ファング)に反撃すら許さない圧巻の高速戦闘。ついこの間まで、武器の扱い方すら覚束なかったとは到底思えない程の見事な手際である。

手に握る短刀を水平に一閃し、最後の牙狼(ファング)を斬り伏せたモーメットは短刀に滴る血を振り払い、短刀を鞘に収める。モーメットはこの二月(ふたつき)の間で慣れ親しんだ自分の内なる器が充たされていく感覚を全身に感じながら、周囲に散乱する魔物の残滓たる魔晶(クリスタル)を拾い集めていく。

迷宮内部に棲息する魔物は迷宮内部に満ちる高濃度の魔素(エーテル)によって顕在化した異界の思念体である。元々はエネルギーの塊でしかなかったものが、顕在化により迷宮内で生存する限りは一個の生物として振る舞うようになる。そのため魔物の肉体は斬れば血が流れるが、生命(いのち)が絶たれると肉体は跡形もなく消滅する、という訳だ。

また、魔物が消滅すると魔物の肉体を形作っていた魔素(エーテル)が凝結し、魔晶(クリスタル)としてその場に残留する。この魔晶(クリスタル)をギルドの専用窓口に持って行くとサイズに応じた金額で換金して貰えるため、迷宮都市パルマリウスを拠点に活動する冒険者の主な収入源となっていた。

◇◇◇

自らに課したその日のノルマをこなし終え、地上に帰還したモーメットはギルドの担当窓口で魔晶（クリスタル）の換金を済ませると多くの宿屋が軒を連ねる宿場街ではなく倉庫街へと足を運ぶ。

モーメットはこの二月（ふたつき）の間、シアの倉庫兼自宅で世話になっていた。

武器を見繕って貰った後、その日の宿を探すべく宿場街に向かおうとしたモーメットだったが、ゴライアスに魔具を持って低ランク向けの安宿に泊まるのは止めるように、と忠告された。安宿は防犯設備が充分でなく、また盗難に遭ったとしても何の補償もされないからだ。しかし、魔具持ちとはいえ、ほぼ文無しの駆け出し（ノービス）に過ぎないモーメットが防犯対策の行き届いている分、割高な宿泊施設を利用するなど逆立ちしても無理な話だった。

リスクを負ってでも安宿に泊まるか否か悩むモーメットに対して、狙った獲物は逃がさんとばかりにシアが猛烈なアピールを敢行したことによって現在（いま）に至る。

当初、モーメットとしてはある程度宿泊費を稼げるようになった段階で宿屋に移ろうと考えていたが、シアの腕によりを掛けて振る舞われた手料理と魅力的過ぎる肢体を最大限に利用した色仕掛けの合わせ技（ツープラトンアタック）によって胃袋と煩悩を盛大に刺激され三日を待たずして陥落した。

住まいと食事、それにボロボロだった服まで新調して貰い、衣食住全てをシアに面倒を見て貰っているモーメット。有り体に言えば、紐である。

身も心もシアの虜となり、すっかり骨抜きにされたモーメットはシアの手料理を楽しみに今宵も酒場に寄らず直帰するのだった。

その日の夜、シアの手料理を満足いくまで平らげたモーメットは自室として使わせて貰っている客間のベッドの上で魔導書と対峙していた。以前到達した第二界層で入手していたため、魔導書と触媒についてのレクチャーをシアから受けてはいたが如何せん学のないモーメットには理解するには程遠いものだった。興味がある分理解出来ないことが悔しい、とモーメットは苛立ちを覚える。

そこに客間の扉を叩く音がした。一拍置いて部屋の外からシアの入るよ、という声が掛かり直ぐさまモーメットは入室を促す。

扉を開けて部屋の中へと入ってくるなり、シアはベッドの上に陣取るモーメットの裏手に回り込むと背後から優しく包み込むように抱き付いた。

「あまり根を詰めちゃ駄目よ？　魔法は一朝一夕で使いこなせる程、簡単なものじゃないんだもの」

「分かってはいるんだ……でもどうにも悔しくて」

優しく我が子をあやすように諭すシアに対して、モーメットは素直に感情を吐露する。

「フフフ……初めての探索で第二界層の魔具を入手したり、良い先輩冒険者に巡り会ったりこれまで順風満帆だったものね」

私との出逢いも入るかしら、とシアは少しおどけたように話を続ける。

「魔法に悪戦苦闘しているのは冒険者としての最初の関門かしら……焦ったら上手くいくことも思うようにいかないわ、近接戦闘と同じく地道にやっていくしかないのだから」

その後、森人（エルヴス）の血を引くモーメットなら魔法の適性があるはずだから頑張って、とシアに励まされたが、それからも独学では大した成果を上げることは出来なかった。

そんなある日、偶々ギルドで再会したゴライアスに魔法についての相談をしてみるとゴライアスの知人である一人の魔法使いを紹介してくれることになった。

老魔道士カスパールーかつてSランク冒険者として世界的に名が知られた稀代の大魔道士である。近年は一線を退き後進の育成に力を入れていると噂されている。

思いも寄らない大物を紹介されることになったモーメットは、ただ簡単な魔法が使えれば何かと便利だろう程度に考えていただけなのにどうしてこうなったのか、と一人嘆息するのだった。

Smooth sailing（後書き）

随時改稿

The sudden visit

急遽、ゴライアスの案内で稀代の大魔道士が滞在する屋敷へと連れて来られたモーメットは今直ぐにでも帰りたい程の緊張感に苛まれていた。

既に彼を此処へ案内した巨人の姿はない。ゴライアスは久し振りに再会したという老魔道士カスパールの関係者と思しき男性ーシェディムと暫しの会話を交わした後、モーメットの紹介と突然の来訪の理由を伝えてさっさと帰ってしまったのだ。どうやら何か外せない用事があったことを思い出したらしい。

ゴライアスに置き去りにされ、敵地（アウェー）の真ん中で孤立無援の兵士になった気分を味わっていたモーメットだったが、そんな彼の様子を観察して少し思案していたシェディムに屋敷の中へと招き入れられた。魔法使い然としたローブ姿、精緻なビスクドールの如き整った小顔に長い黒髪を後ろで束ねた中性的な容貌が目を惹くシェディムに促されるまま、後に続いて歩くモーメットは悪趣味にならない程度に煌びやかな装飾で纏められたエントランスホールを抜け、赤絨毯が敷き詰められた廊下の先、応接間のような部屋に通される。

「師（マスター）を呼んで参りますのでお掛けになってお待ちください」

屋敷の一室にモーメットを案内したシェディムは、そう言い残して部屋の外へと出て行った。

此処に来るまではこの機会に魔術的な知識を少しでも得られるかもしれない、という打算がモーメットにも少なからずあった。しかし、ゴライアスの紹介でやってきたものの彼（か）の偉大な魔法使いが対

価もなしに何処の馬の骨とも知れない駆け出し冒険者の自分に指南してくれるものなのか甚だ疑問だ。第一界層での戦闘であれば、問題なく敵を始末することが出来るようになってはいるが、未だ日々の稼ぎをどうにか遣り繰りして探索に必要な物資の調達や武器の修繕に充てている小市民（モーメット）である。まだシアには受け取って貰えていないが、今後は家計にも幾らかお金を入れようとも考えている紐（モーメット）としては、高額な対価を要求されても払える気がしなかった。

不安に駆られながらも指示に従い、部屋に用意されていたソファーに腰を掛けてカスパールを待つことにしたモーメットは、手持ち無沙汰だったこともあって持参した魔導書や触媒の確認を始めた。来る途中に倉庫街に立ち寄り、塒（ねぐら）から取って来たものだ。万が一、対価を要求された場合の保険である。

今回、カスパールの下を訪れるにあたり、第二界層で入手した魔導書四冊と触媒七つを持参した。残念なことに魔導書は精霊言語で記述されているためモーメットには読めないし、触媒に至っては何をどうやって使うのかすら見当も付かない物ばかりである。

シアのレクチャーにより、触媒が高位階魔法や秘術の行使などに不可欠な道具であることをモーメットは理解していたが、魔術師ではなく商人であるシアの『鑑定（アナライズ）』スキルで分かる範囲に魔術的な用途についての情報まではなかったため、レクチャーでそれ以上の知識を得ることは出来なかった。

モーメットは魔導書と触媒の確認に続いて、黒塗（ジェスロッド）りの杖を手に取る。杖頭に小振りな黒の宝珠があしらわれたシンプルながら洗練されたデザイン。闇の精霊石から切り出された宝珠と杖身に刻まれた紋様のような『増幅（マクート）』の刻印（ルーン）により、暗黒魔法の発動具として最大

限の効果を発揮する魔具である。

モーメットとしては、杖も魔導書も触媒も元々魔法を使う予定もなかったのでさっさと換金しようと考えていたものだ。しかし、シアに迷宮探索における魔法の有用性とモーメットの出自（ルーツ）である森人（エルヴス）の魔法に対する資質について膝詰めで一晩みっちりと説かれたことで、手放すことなく己の糧にする方針へと転換したのだった。

モーメットが手にしていた杖をテーブルに置いたところで、扉をノックする音が室内に響き渡った。失礼しますと一言断りを入れ、シェディムが室内へと足を踏み入れ用件を告げる。

「お待たせ致しました。師（マスター）はまもなく此方に到着されますので、もう暫くお待ちください」

堂に入った流麗な所作で用件を伝え終えると、シェディムは直ぐさま廊下からカートを持ち込み何かの用意を始める。この時、モーメットは厭な予感をひしひしと感じていた。色は鈍い赤紫、妙に甘ったるい香りが仄かに漂う謎の液体を透明のグラスに並々と注がれ、何の説明もなく無言で目の前に差し出された場合、当事者はどのような反応をするのが正解だろうか。

先程までの雰囲気から一変したシェディムによって唐突に用意された得体が知れない、まず飲めるのかどうかすら分からない謎の液体に対して戸惑いを隠せないモーメット。何かを振る舞われるという経験が絶対的に乏しい彼にしたらどう対処すればいいのかさっぱり分からない状況である。そんな彼にさあ飲め、と言わんばかりの視線を無言で向け続けるシェディム。質問すら許されないような空気が支配する中、遂には堪えられなくなったモーメットがその液体

を自棄になって一気に飲み干してしまった。

口内に広がる今まで経験したこともない強烈な甘み。

果物を搾ったもの特有のドロドロとした舌触りと異様に引っ掛かる喉ごし。

鼻から抜ける眉をしかめる程の甘ったるい香り。

実際にはモーメットがそれらを感じることは殆どなかった。飲み干したのとほぼ同時に意識を手放したからだ。

モーメットは決して毒を盛られた訳ではない。謎の液体の正体は、アナバージの実と呼ばれる希少な果実を搾った果汁飲料（ジュース）であり、飲むに耐えない悶え苦しむ程の甘味が特徴的なドリンクだ。開いた口が塞がらない程高価なこともあって好き好んで飲む物好きは皆無といえたが、アナバージの実にはある秘密が存在する。それは、実の特性である内在魔力への干渉。

アナバージの実ーー通称、魔法の果実。魔法の資質があろうと混沌としているために利用することが出来ない内在魔力に直接働き掛けて調和を齎し、強制的に魔術回路を構築してしまう奇跡の果実。

その力技としか言えない強力な効果により、魔法の資質を持つ大抵の使用者は意識を失い、運が悪ければ命を落とすこともあり得る危険な代物だった。

◇◇◇

モーメットが気が付くと、そこは先程までいた応接間ではなく知

らない天井が広がる寝室のベッドの上だった。

記憶が混乱する中、どうにか身体を起こして一体何があったのか思い出そうとするモーメットに虚空より声が掛けられる。

「お目覚めのようじゃな。歓迎しよう、黒き森の民と常闇に住まう影の流れを汲む者よ。世界の深淵たる魔の領域へようこそ」

誰も居なかったはずの室内に突然現れた一人の老人。象徴的なとんがり帽子と揃いの赤黒いローブに身を包んだその人物こそ、世界的に名を知られた偉大な魔法使いーー老魔道士カスパールその人だった。

The sudden visit（後書き）

随時改稿

concern（前書き）

間が空いた上に挿話です。

concern

迷宮都市パルマリウス西方通り市場。朝早くから露天商がひしめき合い、昼下がりになろうとも常に変わらない賑わいを見せている。往来の絶えない表通りから少し外れた一角、いつもと変わらない場所でシアは商品を広げていた。

彼女の露店には其処いらの露天商が扱う商品よりもかなり上等なモノが取り揃えられている。しかし、ギルドの商業部門主催の出店場所を決める抽選において、天性のくじ運の悪さが遺憾なく発揮されたために立地最悪の出店場所での商売を余儀無くされていた。出店場所を決める抽選は、一年を半年で区切った上半期と下半期のそれぞれ初めに開催されるため、それまで場所の変更は叶わない。そのことを重々承知しているシアは不満はあっても納得して日がな一日商品を広げ、市場の外れまでやってくるような物好きが来店するのを待ちつつ、他の作業でもしながら時間を潰すのが常だった。

だが、この日のシアは様子が違った。

いつも快闊としている彼女には珍しく元気がなく、寝不足気味なのか目の下の隈が酷い。色白の肌も今日に限っては青白く見え、すこぶる体調が悪そうだ。店を出してはいるが心此処にあらずといったシアの様子を心配して、周りの露店の商人たちが声を掛けた。

「具合が悪そうだけど何かあったのかい？　手伝えることがあったらいつでも言っとくれよ、シアに頼まれたなら皆率先して手を貸してくれるだろうからね」

「そうだとも、俺たちに出来ることなら何だって言ってくれよ」

「遠慮せんでええからのう」

周囲の商人たちの暖かい言葉を受けてシアは感極まったのか泣き出した。張り詰めていたものが緩み、堰を切ったように押し込めていた感情が溢れ出す。

周囲の誰もが動揺してどのように対処すべきか困惑する中、シアはようやく泣き止み、ぽつりと自らの心の内に抱えていたあることを呟いた。

「……ないの」

『え……』

「モーメットが帰ってこないの」

◇◇◇

「要するに、あのヒヨッコが三日前に迷宮探索に出掛けてから今日まで連絡もなく帰ってこないと」

「はい……」

「それが心配で一睡も出来ていない訳だね。だから具合が悪そうだったのかい、身体を壊したらどうするつもりなのかねぇこの娘(こ)は……」

西方通りにおける数少ない店舗の一つ、『ディープトード』の一室にて＜西の主（マーケットマザー）＞と迷宮都市の商人、冒険者たちから慕われる女傑マダム・ショコラータは、半ば強制的に店仕舞いをさせられ連れてこられたシアと商談用のソファーに向かい合わせに座って話をしていた。

燃えるような赤髪を靡かせ、老いたりとも色褪せない美貌と鍛え抜かれた肉体を誇るショコラータは女人族（アマゾネス）の元冒険者であり、現在は迷宮都市パルマリウス内でも特に強い影響力を持つハインリッヒ商会のトップを務める実力者だ。

シアの変調を聞きつけて市場の外れを訪れた彼女は、シアを心配して集まっていた商人たちを仕事に戻らせるとひとりにしておくのは危ういシアを自らの店舗へと連れてきた。

「あんたがあのヒヨッコにそこまで入れ込んでいるとはねえ……」

ショコラータは所在の知れないモーメットを心配して憔悴しきったシアの様子を目の当たりにし、冒険者の女となったからには覚悟しなければならないことだろうに、と呆れる一方、普段目を掛けて娘のように可愛がっていることもあって少し不憫に感じていた。そのため、老婆心から自らが持つ情報網をフルに活用し、直ぐさまモーメットに関する情報を幾つか入手させたのだった。

「……調べさせた限り、迷宮でおっちんじまった訳じゃないらしい。三日前に中央でチェックを受けた記録が残ってるからそれは確かだろうね」

「よ、良かった……」

ショコラータから齎された情報を受けてシアの表情(かお)に安堵の色が浮かぶ。しかし、ショコラータはそんなシアに対して厳しい言葉を続けた。

「安心するにはまだ早いよ。まだ迷宮にはいないことが分かっただけなんだ。まだあのヒヨッコが今何処に居るのか分かった訳じゃない」

「はう……」

その言葉によってまた蒼白となるシア。モーメットが何処かで野垂れ死んでいる光景でも想像したのだろう。その様子を見て、シアの精神が薄氷を踏むかのような危うさを孕んでいることに辟易とするショコラータだったが、すかさずフォローを挟んだ。

「まぁ自ら厄介事に突っ込むような馬鹿じゃないだろうアレは。それにあんなヒヨッコでも今じゃ一端の冒険者だ。下手打ってくたばる程、柔じゃないだろうさ」

世界各地を渡り歩く者やクエストを主にこなす者にとって二月(ふたつき)は大した期間ではない。しかし、迷宮探索を主体として活動する冒険者にとってその期間は一人前と呼んで差し支えないものだ。それ程までに迷宮に挑み生還することは並大抵のことではないのである。

中でも迷宮都市パルマリウスを本拠地とし、『伏魔殿(パンデモニウム)』の探索を行う者であるなら尚更だった。『伏魔殿(パンデモニウム)』は世界各地に存在する迷宮の中でも最高レベルの危険度を誇る未踏破の迷宮なのだ。生還率は三割を切るとされ、駆け出(ノービス)しが挑んで生還することの方が稀である。そんな所で二月(ふたつき)もの間、命のやりとりを続けた猛者がましてや迷宮の外で簡単にくたばる訳がないことをショコラータは自身の経

験から確信していた。

「流石にさっき調べさせ始めたばかりだとあまり情報は入ってこないもんさ。それにこんな時間じゃ何かしら事情を知っているだろう連中もまだ戻ってきてないからねえ……明日の朝にはある程度の情報は出揃っているだろうからあんたは少し寝るんだよ」

「で、でも……」

「あんたが起きてても何か出来る訳でもないし、身体を壊しちゃ元も子もないじゃないか。あのヒヨッコが帰ってきた時にあんたが倒れてたらどう思うかね」

「……！　それは……」

「意地の悪いことを言って済まないねえ……だけど、これもあんたのためだよ。そこの仮眠室にグースティーを用意させたからそれ飲んだら直ぐ夢の中さ。ほら、さっさとお行き」

「……分かりました。何から何までありがとうございます、マダム」

渋々といった様子で仮眠室へと向かうシアだったが、自分でもこのままではいけないことは理解していたのでショコラータの申し出を受け入れたのだった。

仮眠室へとシアを見送ったショコラータは、シアには伝えなかった二つの未確認情報について思考を巡らせる。

一つは、巨人族（ギガース）と同行していたという目撃情報。この迷宮都市においてその人物に当てはまるのはただ一人だけなのだが、彼が今、

迷宮都市に居ないことを彼女は誰よりも知っている。巨人族（ギガース）の戦士ゴライアスに都市外のクエストを依頼したのは他ならぬ彼女自身なのだから。彼なら何か事情を知っているかもしれないが、半年は此方に戻ることはないので話を聴くことは不可能だ。

もう一つは、ここ最近ギルドの書庫を頻繁に利用する姿が目撃されていること。迷宮探索を専門に行う者にとって書庫を利用する目的として考えられるのは、魔物情報か道具解説、魔法入門ぐらいに限られる。

先程はシアを休ませることを優先させたが、シアが起きたらモーメットの最近の行動についてヒアリングする必要があるとショコラータが思案していると、ふと依頼をする際にゴライアスが約束の時間に少し遅れてきたことを思い出した。遅れた詳しい理由を問うことはしなかったが、あの時彼は爺の処に行っていたと言ったはずだ。ショコラータはゴライアスとそれなりに長い付き合いではあったが、彼が爺と呼ぶ人物が誰なのかまでは分からなかった。モーメットの所在にこの爺と呼ばれる人物が関係している可能性が高いと考え、最重要事項として対応することをショコラータは心に決めるのだった。

ショコラータの下にゴライアスが爺と呼ぶ人物が伝説の魔法使い、老魔道士カスパールであるという驚愕の情報が入るのはこの三日後の出来事である。

concern（後書き）

随時改稿

pursuit of knowledge（前書き）

早く本筋に行きたい。

pursuit of knowledge

まっさらなキャンパスを黒のインキで一面塗りつぶしたかのような夜空に向かい、煌々と燃え上がる木偶人形。その光景を眺める二人の男の姿があった。辺りは森を切り開いた土盛りの訓練場といった様相で、一目では何に使うのか分からない器具も設置されている。

「これが火の精霊魔法で最も有名な『火球（ファイアボール）』です。下級魔法に分類されますが、残念ながら魔法適性のある誰もが扱える訳ではありません」

説明を続けながら、シェディムは火達磨と化した木偶人形に向けて『爆泡（バブルボム）』を打ち出す。無数の水泡が燃え盛る木偶人形へと殺到すると一斉に炸裂し、火を一瞬にして消し飛ばした。その威力は木偶人形の残骸すら遺さない。ただ、火を消すためにわざわざ折り紙付きの破壊力を有する魔法を使用したのか、モーメットは少し気になったが深くは考えないことにした。モーメットも我が身が可愛い。

「精霊魔法の行使が可能か否かは、各属性を司る精霊の加護によって決まります」

シェディムは右手の掌に小さな灯程（あかり）の火の粉を生み出すと瞬く間に大きな炎の塊へと変化させた。卵のようなその炎を中空へと放り投げると炎は鳥の姿を象り、まるで生きているかのように空を優雅に旋回してゆっくりとシェディムの肩へ降り立った。

「このような火の精霊魔法の場合、火精（サラマンダー）の加護の程度によって行使可能な魔法の種類、威力などが決定されます。尚、加護が強ければ強い程強力な魔法を行使することが出来ますが、逆に火精（サラマンダー）の加護を

持たない者は火の精霊魔法そのものを行使出来なかったり、行使出来ても精々『火種（フラワー）』のみだったりと加護を持つ者との間に大きな隔たりが存在することを知っておいてください」

最後に精霊の加護が個人の資質の問題であって努力でどうにかなる問題ではないことを付け加え、精霊魔法について最低限の説明を済ませるとシェディムは肩に止まる火の鳥を消し去り、聞き役だったモーメットに木の枝のような一杖の木製杖を手渡した。一見何の変哲もないその杖をモーメットが手にした途端、二人の周囲がざわめき始める。

「どうやら精霊たちが敏感に察知しているのでしょう。その杖は世界樹（イグ・オブ・イグドラシル）の小枝と呼ばれる精霊の依り代に最も適したものです。本来はその杖を手にした状態で『魔力拡散（ヤクト）』を行うことでどの精霊魔法が行使可能か調べるのですが、手間が省けましたね」

突然の事態に警戒するモーメットに対し、シェディムは何てこともないように淡々と落ち着き払った様子のまま解説をしていく。シェディムの何事にも動じない様子を目の当たりにし、何とも剛胆な人だと思うモーメットだった。

◇◇◇

モーメットが偉大なる魔法使いの門下となり、早一月の時が流れた。魔術回路を死と隣り合わせの手段で構築されたことを聞かされた時は流石に肝を冷やしたが、自らの内なる魔力が分かるようになったことは新鮮な驚きに満ちた体験だった。

現在、モーメットが居るのは迷宮都市ではない。カスパールと対面を果たしたその時には既に移動していたため、正確な場所は分からないが、それでもモーメットは此処が迷宮都市からかなり離れていることを周囲に群生する草花から理解したのだった。

この一月の間、手始めに魔力を扱う上で「一にして全」とさえいわれる『魔力制御』の手解きを魔法の師となったカスパール直々に受け、モーメットは魔術の基礎を徹底的に叩き込まれた。飲み込みが早かったこともあり、半月程でモーメットの『魔力制御』も荒削りながらも形となったため、次の段階へと進むことをカスパールに許されたのだが、指導はカスパールから兄弟子に当たるシェディムに引き継がれることとなった。カスパールは世界中に名を知られた大魔道士のため、常に多忙な身であるのだ。にも関わらず、モーメットが半月もの間直々に指導を受けられたことは異常事態とさえいえた。

モーメットがカスパールに代わり、カスパール門下の中でも有数の実力を持つシェディムの教えを仰ぐことになって半月、その指導は苛烈を極めた。

精霊魔法を精霊との意志の共有と真顔で語るシェディムが必要最低限の説明を済ませてモーメットに適性がある精霊魔法を調べた後に待っていたのは、『魔力制御』の基礎訓練である『瞑想』とシェディムが精霊魔法を延々と行使しながらモーメットを追いかけ回す壮絶な『鬼ごっこ』の繰り返しの日々だった。

シェディム曰わく、この『鬼ごっこ』は精霊魔法を肌で感じることが出来る至高の訓練法であるらしい。そう言われてもカスパール所有の敷地内に存在する広大な森の中を命からがら逃げ回るモーメ

ットに向かって、表情を変えることもせず高威力の精霊魔法を乱発するシェディムの姿は加虐趣味を持つ異常者以外の何者でもなかった。

初めは『隠密（ハイド）』スキルを使うことでシェディムの追撃を躱すようにしていたモーメットだったが、シェディムが周囲一帯に『火球（ファイアボール）』や『風刃（ウィンドエッジ）』などを無差別射出し始めたことで、『早足（クイック）』『隠密（ハイド）』を駆使した生死を懸けた逃亡劇へと変貌を遂げたのだった。

何度か魔法の直撃を受ける危ない場面にはあったが、やがて魔力を認識出来るようになった影響からか精霊の存在を視認とはいかないまでも朧気ながら把握出来るようになったモーメットは、ただ闇雲に逃げ隠れるだけでなく精霊魔法が行使される直前にシェディムの周囲に集まる精霊の気配から次に発動する属性を判断し、それに対抗する精霊魔法で威力の軽減や相殺を図れるまでに成長した。そのことを踏まえると命懸けの『鬼ごっこ』にも意味があったようだと自分自身を納得させるモーメットだった。

当初は魔法のことを使えれば便利程度に考えていたモーメットだったが寝ても醒めても魔法漬けの生活を送るうち、より多くを学びたい、より世界の深淵へと近付きたいと考えるようになっていた。魔術の研鑽に没頭し、『魔力制御』を極めんとするモーメット。その傍らで森の木々の色合いは刻々と移り変わり、新たな季節の到来を報せていた。

pursuit of knowledge（後書き）

随時改稿

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3757x/

Skanda――迷宮土竜の狂想曲――

2011年12月13日07時46分発行